

THE SOCIETY FOR RESEARCH IN ASIATIC MUSIC

社団法人 東洋音楽学会 会報 第47号

発行(社) 東洋音楽学会〔事務所〕〒110-0001 東京都台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号
TEL.03-3823-5173 FAX.03-3823-5174 E-mail LEN03210@nifty.ne.jp

目次

第30回通常総会招集状……………1	定例研究会発表募集……………3
第50回大会のご案内……………1	定例研究会報告……………3
竹内道敬氏が河竹賞を受賞……………2	図書・資料等の受贈……………10
機関誌『東洋音楽研究』原稿募集……………2	新刊書籍……………11
会費納入のお願い……………2	新発売視聴覚資料……………11
フィールドワークにおける一学会員の問題について……………2	前号の訂正とお詫び……………12
定例研究会開催予定……………2	編集後記……………12

第30回通常総会招集状

1999年9月10日

社団法人 東洋音楽学会会員各位

社団法人 東洋音楽学会
会長 久保田 敏子

社団法人東洋音楽学会定款第23条及び第26条の定めに基づき、第30回通常総会を下記の通り開催いたしますので、正会員は、ご出席下さい。

記

日時 1999年10月17日(日) 14:00-15:30

場所 東京学芸大学芸術館

審議事項

- 第1号議案 1998年度事業報告の件
- 第2号議案 1998年度収支決算の件
- 第3号議案 1999年8月31日現在
貸借対照表、財産目録の件
- 第4号議案 1999年8月31日現在
会員移動状況の件
- 第5号議案 1999年度事業計画の件

- 第6号議案 1999年度収支予算の件
- 第7号議案 制度委員会答申の件
- 第8号議案 横道萬里雄氏を名誉会員に
推薦する件
- 第9号議案 その他

- ・出欠を同封返信葉書により、9月25日(土)までにお知らせ下さい。
- ・欠席の方は、委任状欄に必ずご署名、ご捺印の上、ご投函下さい。
- ・議案を提出なさりたい方は、予めご連絡下さい。

第50回大会のご案内

(社) 東洋音楽学会第50回大会を、同封のプログラムの通り開催いたします。どうぞ多数ご参加下さい。

◎出欠の回答

出欠のいかんにかかわらず、同封返信葉書の各欄に漏れなくご記入の上、9月25日(土)必着でご返送ください。

なお、総会欠席の方は、必ず委任状欄にご記入ご捺印ください。

◎大会参加費・懇親会費・昼食代の納入

会場受付の混雑を避けるため、同封の振替用紙にて、できるだけ10月5日(火)までにご送金ください。やむをえず間に送金なされた方は、「払込受領書」を受付に提示してください。なお、払い込む金額は下記の通りです。

大会参加費……3,000円(学生2,000円)

懇親会費………4,000円

昼食代………800円

◎2日目の昼食について

お弁当を手配いたします。会場の近くには適当な飲食店がほとんどありませんので、ご予約されることをお勧めいたします。

◎プログラム

当日会場ではプログラムの再配付はいたしません。同封の冊子を忘れずにご持参ください。

竹内道敬氏が河竹賞を受賞

本学会会員の竹内道敬氏が、著書『近世邦楽考』(南窓社)の業績により、1998年度第31回日本演劇学会河竹賞を受賞されました。河竹賞は河竹繁敏博士を記念して、日本演劇学会会員の優れた年間業績に対して贈られるものです。授賞式は去る5月29日に行われました。

機関誌『東洋音楽研究』原稿募集

『東洋音楽研究』第65号(2000年8月発行予定)の原稿を募集しています。原稿の種別は、論文、研究ノートおよび報告です。それぞれの制限枚数や執筆要領および郵送先については、『東洋音楽研究』第64号の巻末の「投稿規程」をご覧ください。締め切りは1999年12月20日(厳守)とします。問い合わせは機関誌編集委員の櫻井哲男(電子メール tbr@mx1.harmonix.ne.jp またはファクス 06-6875-2562)まで。

(機関誌編集委員会)

会費納入のお願い

9月1日より本学会の1999年度(1999年9月1日~2000年8月31日)に入りました。新年度会費の納入をお願いいたします。会費請求書と振替用紙を同封いたしました。会費請求書で未納金額をお確かめのうえ、振替用紙にて早速払い込みください(振替用紙の住所・氏名欄には記載漏れのないようご注意ください)。会費滞

納がありますと機関誌をお送りできません。

なお、昨年度より会費は以下の金額に変更となっています。

正会員 年額 8,000円

学生会員 年額 6,000円

(親子、夫婦会員 各1,000円ずつ増額)

昨年度の会費を7,000円払い込まれた方は、お手数ですが、差額(1,000円)をお支払い下さい。

本紙と行き違いに納入がありました場合は、どうぞご容赦ください。

フィールドワークにおける 一学会員の問題について

1998年9月、本学会の一学会員のフィールドワークの問題が一部の週刊誌記事にとりあげられましたが、本年5月20日付で、当の学会員より久保田敏子会長宛てに、経緯の説明と、学会の名前が週刊誌に出たことに対するお詫びの書状が送られてきましたことを報告いたします。

定例研究会開催予定

<本部>

◇第426回 1999年10月2日(土) 1時-4時

上野学園日本音楽資料室

研究発表:

1. 「今なぜ『伝統』なのか?—音楽民族学の視点からみた日本の民俗芸能の現在—(仮題)」
島添貴美子
2. 「20世紀初頭バリ島におけるサンギャン儀礼のケチャについて—鑑賞性と宗教性をめぐる問題—」
篠田暁子(大阪芸術大学)

研究報告:「チベット音楽の今日的状況」

坪野和子(埼玉大学)

*訂正 会報46号(9頁)では第426回定例研究会の開催日に誤りがありました。10月2日(土)に訂正させていただきます。

◇第427回 1999年12月4日(土) 2時-4時30分

(日本音楽学会関東支部との合同例会)

お茶の水女子大学共通講義棟2号館102教室
シンポジウム:

「大学における楽器学の位置づけについて(仮題)」

パネリスト:郡司すみ(楽器博物館・コレクション国際委員会副委員長)

茂手木潔子(上越教育大学)

司会: 柘植元一(東京芸術大学)

◇第428回 2000年2月5日(土) 1時30分-4時
上野学園日本音楽資料室
発表者未定

<関西支部>

◇第195回 1999年9月25日(土) 午後2時-5時
国立民族学博物館第6セミナー室
(民博北側通用口で「東洋音楽学会定例研究会
に出席」と告げて入館ください。)

研究発表:「土地の声とパフォーマンスーヤップ
島の踊りをめぐる考察ー(仮題)」 小西潤子
特別講演:「トルコのマカーム研究における歴史
的変遷の過程」 ロバート・ガーフィアス
(カリフォルニア大学アーヴァイン校
人類学部教授/民博客員教授)
(なお特別講演は日本語でおこなわれます。)

◇第196回 1999年11月28日(日)

京都・東本願寺および大谷婦人会館
見学:坂東念仏讚

研究発表:「坂東曲について」(仮題) 澁谷由美 他

定例研究会発表募集

下記の定例研究会における研究発表(口頭)を
募集します。発表希望者は、発表題目、要旨(800
字以内)、氏名、所属機関、職名、連絡先(住所、
電話、Fax、E-mail等)を明記し、学会事務所に
申し込んで下さい。

◇第428回 2000年2月5日(土) 1時30分-4時
上野学園日本音楽資料室

定例研究会報告

◇第421回定例研究会(1999年3月6日)

上野学園日本音楽資料室

○卒業論文発表(4件)

1. 福島市飯坂町に伝わる祭り囃子の研究

ー「飯坂太鼓」を中心にー

安斎和佳子(国立音楽大学)

司会:茂手木潔子(上越教育大学)

(以下3まで司会は茂手木)

<発表要旨>

松尾芭蕉が「奥の細道」の道中に立ち寄った温泉地として知られる福島市飯坂町は現在六つの地区からなる。「飯坂太鼓」は六地区の一つである飯坂地区の八幡神社祭礼で演奏される祭り囃子であり、その起源に関しては「三百年以上前に京都祇園囃子から習ってきたもの」と伝えら

れている。本論の主たる目的は、この言い伝えの信憑性を探り実際に飯坂太鼓がどのようなルーツによって今日に伝えられているのかを辿る事になる。本論の主眼に焦点を当てる前に、飯坂地区に隣接する茂森地区の祭り囃子について取り上げておく。この地区の祭り囃子は、曲目・曲調・楽器の編成など飯坂太鼓と共通する要素が多いことから、飯坂太鼓と何らかの関わりがあると考え調査にあたった。その結果、飯坂太鼓が百年ほど前に伝播したものであると考察している。

一つの芸能が伝播する時には、曲目・曲調・楽器の編成・奏法など、何らかの形で伝播の痕跡が確認されると考える。つまり前述の飯坂太鼓の起源に対する伝承が事実であれば、今日の祇園囃子と飯坂太鼓との間にも何らかの共通点が見出せるはずなのだ。これを確認するために両者の囃子の比較を行った結果、両者の間には言い伝えを裏付けるような共通点を見出すことができず、飯坂太鼓が祇園囃子を起源としている可能性は低いという結論に至った。さらに飯坂太鼓のルーツを探るために、飯坂周辺各地の祭り囃子や他の芸能音楽との関連に着目した。その結果、下座音楽や神楽の中に飯坂太鼓の起源に関わっているのではないかと推察される曲目が存在することが分かった。これらの音楽から飯坂太鼓への転用の可能性について今後さらに調査を加えて行くことが課題である。

<司会寸言>

福島市飯坂町飯坂地区の八幡神社祭礼で演奏される「飯坂太鼓」が祇園囃子に起源をもつとされる点について、共通点の多い近隣の茂庭地区の囃子にも言及しながら分析した結果、曲名、使用楽器ともに祇園囃子との関連は希薄である点が指摘され、むしろ下座音楽や神楽との関連の可能性が指摘された。

各地の祭り囃子には祇園囃子起源説が多い。しかしながら、曲名の類似性、旋律の共通性などから、能あるいは神田囃子との関連が指摘できる囃子も多い。当囃子でもその点が確認された発表であった。なお、伝承の実態を調査する過程においては、楽器を口頭伝承するための唱歌の存在にも注目することが今後の課題となろう。

2. 日本における歌掛け

ーその機能と南島の事例を中心にー

中野玲子(国立音楽大学)

<発表要旨>

日本各地に伝わる歌の中には、歌掛けと呼ばれる歌の掛け合いの形態がある。日本では古来から「歌垣」として風土記や万葉集などにその記述があり、また今日でも各地で儀礼歌や歌遊び、労働歌、童歌などにその形態をみることができる。本論文は、歌掛けが実際について最近まで日常に根付いた形で行われており、その姿を最も顕著に残しているといわれる、奄美諸島や沖縄諸島の事例をもとに、歌掛けの機能を確認することを目的としている。

発表では、実際にフィールドワークを行った奄美大島の平瀬マンカイをその一例としてとりあげ、その行事の中で歌掛けが担う役割を述べて考察を行った。この行事は、理想的な出来事が描かれている歌を繰り返し掛け合うことで、その言葉に込められた願いが霊力を伴い、現実のものになるという観念に基づくもので、海の彼方のネリヤから稲魂を招き、豊作を祈ることを目的としている。この平瀬マンカイには、古代日本で行われていた歌垣と共通する要素が二点考えられる。まず第一に、目に見えない霊力の効力を期待して行われるという点、そしてもう一つは、その行事自体が、部落の人々が一堂に会する交流の場として機能している点である。

南西諸島に歌掛けが多く残る理由として、霊力の存在を信じる、という価値観もその一因であると考えられるが、それ以上に、離島であるがゆえに島や部落ごとの共同体が未だ強く結びついていることが挙げられる。そうした地域社会のつながりの中で、人々が一堂に会する行事の折など、誰かが舞台上に立って一方的に歌うのではなく、簡単な囃子程度でも多くの人々が歌を掛け合うという形態をとることは、必然的である。すなわち、このような南西諸島の土壌が、多くの歌掛けを生み、今日まで育んできたといえることができる。

〈司会寸言〉

この発表は、歌掛けの古い姿を色濃く残しているとされる南西諸島、奄美大島の平瀬マンカイを中心に、現地調査を行いながら、現在も残る歌掛けの実態を検証した発表であった。発表に用いられた精度の高いVTRによって、その具体的な歌の情景が示された。マンカイとは、「招く」ことを意味し、この動作によって、海の彼方にある「ネリヤ」（極楽浄土）へ通ずる神の道を作り、またネリヤから稲霊を集落に招き入れることにもなる。

歌を繰り返し掛け合うことで歌の力は強められて「歌魂」となる点に「言霊」の存在が認められ、さらに、単なる一方通行の歌としてではなく、掛け合うことで共同体の相互理解をより深めることになるという。南西諸島という離島の条件と共同体との密接な関わりを象徴する歌掛けの伝承の実態が明らかにされた発表であった。

3. 歌舞伎における「石橋物」研究

—長唄正本を中心に—

横田牧子（国立音楽大学）

〈発表要旨〉

本論文では、石橋物（能「石橋」を題材とした歌舞伎舞踊）が上演されたときに刊行されたと思われる長唄正本を年代順に並べ比較することで、石橋物作品の変遷や特徴を検証しようと試みた。石橋物作品の変遷は、江戸時代中期の女形による石橋、江戸時代後期文化・文政期の変化舞踊における立役の石橋、そして明治時代の女形の芸と立役の芸を融合した形の石橋の3つに大別される。今回の発表では、この石橋物の変遷のなかから、変化舞踊における石橋について考察したことを取り上げた。

まず、『歌舞伎年表』や『江戸近世舞踊史』には、宝暦8年(1758)3月市村座で中村富十郎が変化舞踊「雛祭神路桃」で石橋を演じたと記載されているが、正本を見る限りそれは誤りであることを指摘し、『歌舞伎年表』で「雛祭神路桃」を「富十郎七変化」として、翁・官女・切禿・杜若・春駒・道成寺・石橋と記載したのは安永7年(1778)に同じく富十郎の演じた「繰返七容鏡」の官女・春駒踊・娘（道成寺）・杜若・雛・山賤・石橋と混同したためではないかと推察した。

また文化10年(1813)6月市村座において、七代目市川團十郎が変化舞踊「閨茲姿八景」で演じた能がかりの「石橋の晴嵐」は、その後5回再演され、いずれの再演も長唄の四代目杵屋六三郎と関係が深かったことが正本から確認できるとともに、代々の団十郎が「石橋の晴嵐」を演じる時は能がかりの趣向で演じ、他の役者が同曲を演じる時とは明らかに差別化されていたことから、この「石橋の晴嵐」を天保11年(1840)に七代目団十郎の演じた「勸進帳」の前段階的な作品と位置付けた。

〈司会寸言〉

歌舞伎舞踊の分類の中で「石橋物」に焦点を当てて、江戸時代中期、後期文化・文政、そして明

治時代に至る変遷や特徴を明らかにしようと試みた研究である。

当日の発表では、特に文化・文政時代の変化舞踊における「石橋物」について取り上げられ、次の点が明らかにされた。まず、もともと歌舞伎の「石橋物」は、能と異なって女形の専有芸として上演されていたこと。また、文化10年(1813)七代目市川團十郎によって初演された能がかりの「石橋の晴嵐」は、後の「勸進帳」創作への契機となり、曲の成立には杵屋六三郎と深い関わりがあったことを正本から確認できた点である。

早稲田大学演劇博物館蔵や東京芸大など所蔵の正本を詳細に検討して考察した結果の発表であった。

4. 社会における音楽の機能と意味

一J. Blacking考察を通して一

金光真理子 (東京芸術大学)
司会: 岡崎淑子 (聖心女子大学)

〈発表要旨〉

音楽民族学が比較音楽から発展し、次第に人類学的観点の必要性を訴えるようになる1960年代以降、英国の社会人類学者ジョン・ブラッキング John Blacking(1928-1990)は人間愛溢れる態度で精力的に活動し、今世紀の音楽民族学へ多大な影響を与えた。ブラッキングは音楽を「人間集団の行動の所産」とみなし、社会的コンテクストを考慮した音楽分析こそが、音楽の構造にせよ意味にせよ、その本当の姿を明らかにすると主張した。ブラッキングは南アフリカのヴェンダ族のフィールドワークで「文化的分析 cultural analysis」を実践し、音楽体系が社会体系と相互作用している有り様を示した。ブラッキングは音楽を人間の「生まれ持った能力」と信じ、背景にある人間の「認識体系 cognitive system」及びそうした人間の経験、その集積としての文化や社会を、一連の流れとして表層にある音楽へ結び付けて捉えたのである。こうしてブラッキングが構造分析手段として用いた概念が、「表層構造 surface structure」と「深層構造 deep structure」という、音楽づくりのプロセスの相互関連を意図した二分法である。

ブラッキングの社会的コンテクストを意識した音楽分析は、現代の音楽文化へ適応された場合も、音楽が文化の総体の一片であることを明らかにする。例えば日本生まれのカラオケは世界各地へ輸出されたが、実際にカラオケという技術は同じでも、どこで歌われ(場)、どのように歌うか

(音楽行動)は国や地域と時に応じて多種多様である。言うならば、カラオケという装置を共にしても多様な表層の音楽は、実に深層にある歴史や文化や社会というコンテクストに起因するのである。

音楽は音楽のみにてあらず、必ず人間と共にあり、それゆえに音楽へ機能と意味が生じるとすれば、音楽の機能と意味はその音楽に関わる人にとって各人各様、それぞれの時代や文化や社会といったコンテクストの中に見出されるものであろう。

〈司会寸言〉

音楽学、音楽民族学を学ぶなら必ず出会うJ.ブラッキングであるが、彼の主張を正面から研究しようとしたものは案外少ないかもしれない。ブラッキングは文化と音楽体系の相互作用を重視して文化・音楽分析を行うことを提唱した。これを、カラオケという日本から世界各地に広がった音楽文化に適応した場合について説明がなされたが、それに対してデータはどのように得たのかという質問が出た。今回は文献(三井徹、細川周平著 *Karaoke Around the World*)の考察にとどまったが、将来実地調査をやりたいとの答えであった。今後の実地調査にブラッキング研究が活かされることが期待される。

◇第422回定例研究会 (1999年4月3日)

東京芸術大学

○卒業論文発表 (2件)

1. 歌舞伎陰囃子の研究

一河竹黙阿弥の『青砥稿花紅彩画』を例に一

土田牧子 (東京芸術大学)

司会: 茂手木潔子 (上越教育大学)

(なお、4月例会の司会は全て茂手木)

〈発表要旨〉

私の卒業論文は「歌舞伎陰囃子の研究一河竹黙阿弥の『青砥稿花紅彩画』を例に一」である。陰囃子は歌舞伎の演劇面と不可分である。そこで今回は一つの作品を取り上げ、それに即して陰囃子の姿を捉えることを試みた。その際に中心的な資料となるのが、陰囃子の曲名とその演奏箇所を舞台進行に沿って記した付帳である。対象としたのは、河竹黙阿弥の『青砥稿花紅彩画』における「浜松屋店先の場」と「稲瀬川勢揃いの場」である。黙阿弥は従来の作者に比べ、歌舞伎の音楽面を重視したといわれる。そこで初演の付帳をもとに黙阿弥自身の工夫による初演時の陰囃子について

考察し、次に初演以後の複数の付帳を比較することで現在の形に至る変遷の過程を明らかにした。

論文では付帳の考察の前段階として陰囃子の歴史や作品についても考察を行ったが、本発表では論文の中心となる付帳の比較に内容を限定した。比較したのは初演(文久2年〔1862〕)から昭和46年に至る10種の付帳である。その結果、初演時の陰囃子と現在のものとはかなりの相違があることがわかった。例えば、今日では「浜松屋の場」の弁天小僧の名せりふには〈薩摩合方〉が不可欠だが、初演では〈四ツ竹合方〉であった。さらに弁天小僧の万引が露見してから駄右衛門に呼び止められるまでのくだりには、今日では一貫して〈只の合方〉が使われるが、明治期には中間で〈替った合方〉を用いることが定着していた。また「稲瀬川の場」の五人男の出に一人一人異なる鳴物が使われる工夫も初演以来のものではなかった。その際の唄浄瑠璃の歌詞が初演時から見るとずいぶん省略されていることも注目すべき点である。「浜松屋の場」の幕切れに〈新内〉を用いるところなど、黙阿弥の工夫が残されている部分もある。しかし全体的に見れば初演から明治末期まで様々な試行錯誤を繰り返して変化して、大正時代に入ってから現在の形が確立されたということがいえる。

〈司会寸言〉

研究は、歌舞伎作品における陰囃子の機能の実際、またその歌舞伎における演劇的效果を、『青砥稿花紅彩画』を例に分析した内容である。この作品選択の理由は、黙阿弥が陰囃子によって実現する演劇的效果を重視していたことに注目した点が高い。

研究の結果、「浜松屋店先」「稲瀬川勢揃いの場」の二場に関しては、陰囃子の用法がほぼ確立していること、文久2年(1862)から明治期までの陰囃子には変動が多く、大正末期ごろから定型として確立してきている点が明らかにされた。このことは、芸能における流動性の変容であり、日本的な流動性を持つ「総譜」としての付帳が、近代の文化変容を背景として「楽譜」のように固定化する方向へ変化していった可能性も示唆する結果となった。

2. 能楽『三番叟』の研究

森田都紀(東京芸術大学)

〈発表要旨〉

本稿は、能楽の《翁》の後半部分である『三番叟』の音楽分析を通して、現行『三番叟』の音楽構造を明らかにすることを目的とした。論文では、『三番叟』を前半の「揉之段」と後半の「鈴之段」との二部に分けて分析したが、当日は後半の「鈴之段」の音楽分析に限って発表させて頂いた。

分析の観点には三点あり、その三点に従って論じた。第一に笛の唱歌からみた全体構造、第二に笛と舞との関連、第三に小鼓・大鼓と、舞との関連である。第一としては、笛には「地」と「手」の二種類の譜があり、そのクサリ数は流儀によって異なる事、また狂言方の流儀に従ってその寸法も異なる事を指摘した。しかし、どの流儀も、基本的には「地」を繰り返してその合間に「手」を吹くという仕組みである事を明らかにした。第二としては、狂言方の舞台上の動きを表した図を作成し、笛の唱歌との関連をその図を使って明らかにした。第三としては、まず小鼓は、曲の最初から一貫して小鼓の「地」を打ち続ける事、そのため、三番叟の動きと直接関わっているのは、三番叟の鈴碎きに見計らって打ち止める所だけである事を指摘した。一方、大鼓の手には「地」と数種の「手」があるが、大鼓も笛と同様に、基本的には「地」を打ち続け、合間に「手」を入れる仕組みである事、また、「手」を打つ所は三番叟の足拍子に関連している事を指摘した。

以上の考察より結論では、囃子方・狂言方ともに流儀によって演奏の方法が異なる事、また、囃子方の奏法が三番叟を見計らったアシライである事、の二点を指摘した。現在『三番叟』には正式寸法があるが、本来は実に流動的な音楽構造を持った曲であり、それは、『三番叟』が「神降り」の意味を持った立ち方本位の曲ゆえに生まれた構造であると考えられる。同時に、あくまでも舞い手が舞う事が中心であり、ゆえに囃子・囃子が存在するという音楽舞踊の本質をも、『三番叟』に見出したことを指摘して結びとした。

〈司会寸言〉

能楽の中でも特別な存在として位置づけられる《翁》の後半部分『三番叟』の「鈴の段」に焦点を当て、狂言、笛、大小鼓の各流儀の演奏を分析することによって、現行『三番叟』の音楽構造を明らかにしようと試みた研究である。分析結果として以下の4点が述べられた。1. 流儀によって演奏が異なる、2. 囃子方の演奏はアシライを中心とし、立方の動きを見はからって演奏する、3. したがって曲の構造は流動的になる、4. 特

に太鼓は三番叟の足拍子と密接な関連がある。

また、もともと『三番叟』が持っていた流動的な音楽構造が、神懸かり的な「神降し」を反映していることも述べられた。参加者の意見として、「アシライ」よりも「見はからい」の方が適切ではないかという点、「段」の使用法についてなど用語法の問題が指摘された。

○修士論文発表 (1件)

1. 「バイミュージカリティへの挑戦」の再考

—日本民謡とイタリア歌曲を歌うアメリカ女性の事例研究—

モーリー・アドキンス (東京芸術大学)

(発表要旨)

この論文の目的は、バイミュージカリティの習得が可能かどうかを明らかにすることである。つまり、一人の人間が自文化と異文化の二つの音楽を習得し、それぞれの音楽を独立して演奏することできるかどうかを観察する。

M. フッドは1960年に書かれた論文「バイミュージカリティへの挑戦」で、はじめてバイミュージカリティという用語を使った。

バイミュージカリティを獲得する可能性を明らかにするため、声を識別するもっとも特有の要因、声の音色を実験的に観察した。イタリア歌曲と日本民謡を習得する体験がある著者は、自分を被験者にし、1年間同時にこれらの発声法のレッスンを受けた。

先行研究によれば、声の音色を決めるのは、フォルマント周波数と咽頭腔の動きである。イタリア歌曲を歌う際、喉頭を下げ、咽頭腔を広げると、「歌手のフォルマント」が出現する。日本民謡を歌う際、喉頭を上げ、咽頭腔を狭くすると、「邦楽のフォルマント」が出現する。

被験者がこの二つの発声法を歌い分けられるかどうかを確認するため、二つの実験を行なった。まず、両発声法によって五母音と歌を録音し、フォルマント周波数をソノグラムとスペクトルで分析した。次に、両発声法で以上と同じ五母音と歌を歌い、ビデオ・ファイバースコープによって咽頭腔の動きを撮影した。その結果、被験者が歌う二つの発声には適切なフォルマント周波数が出現し、適切な咽頭腔の動きが観察できた。

これらの実験結果は先行研究によりたてられた仮説を実証するものであった。ゆえに、この二つの発声法を歌い分けることによってバイミュージカリティを獲得する可能性を実証した。しかし、バイミュージカリティの可能性をより完全に

研究するため、ピッチやリズム、強弱、感情表出などの側面から研究する必要がある。

(司会寸言)

この研究は、研究者本人が被験者となり、自文化の音楽を習得した上で異文化の音楽を習得することが可能かどうかについて研究したものである。「バイ・ミュージカリティへの挑戦」という論文タイトルは、M. フッドの1960年の論文から引用された。

本研究で、発表者は自らがアメリカで習得したイタリア歌曲と来日後に日本で習得した民謡の歌唱法について、声の音色に焦点を当てて分析を行った。分析方法には、両者の発声方法で録音した五母音のフォルマント分析、および、喉頭腔の状態の変化をVTR撮影し振動状態の変化を捉えるビデオ・ファイバースコープ撮影をもとに行なった分析方法をとり、実証性の高い研究であった。しかしながら、「ベル・カント」と称される発声法の歴史的な実態や、民族や国によるこの発声のとらえ方の違いなど、研究の前提として考慮すべき課題も多く残されていることが指摘された。

◇第423回定例研究会 (1999年5月8日)

(日本音楽学会関東支部との合同例会)

お茶の水女子大学

○研究発表

日本の陶・—最新出土情報に基づく報告—

近藤直美 (國學院大学)

司会: 笠原潔 (放送大学)

(なお、5月例会の司会は全て笠原)

(発表要旨)

古代中国に起源を持つ土笛「陶・」が日本海沿岸地域の弥生時代の遺跡から出土することは従来から知られてきた。

今回の調査から15遺跡60余個の出土の報告が確認された。また、これまで、陶・は弥生時代前期末をもって消滅するとされてきたが、陶・を出土する遺跡のなかには弥生時代中期初頭まで下る可能性のあるものもあること、また、器高は4cm程度~17cmを越えるものまで、一般に知られてきた以上に多様なサイズをもっていることが判明した。

陶・を出土する遺跡にも相互関係がいくらかみられる。山口県下関市綾羅木遺跡の人々は弥生期前半の末に内陸部に移動したが、その移動先の下七見遺跡でも、陶・が出土している。また、京

都府途中ヶ丘遺跡の人々は特定の一時期だけ、近くの環濠集落である扇谷遺跡へ移り住んだが、やはり両方の遺跡で陶・を出土していることから、生活の場が移動してもその地で陶・を制作・使用していたことが窺える。

日本で出土する陶・の形態的な特徴は大半が機能的に吹奏に適していない点である。このような現象は中国の陶・にはみられない。その原因の一端としてココヤシの実から造形的影響を受けた可能性を考えたい。「魏志倭人伝」にみえる壱岐国に比定されている長崎県壱岐郡原の辻遺跡から出土した陶・型ココヤシ笛には、吹口周辺に2つの小孔が存在している。これはココヤシの内果皮に存在する3つの発芽孔のうち2つに穿孔したものと考えられる。日本陶・の中には、後面の2孔が不自然なまでに吹口に接近しているものがあるが、これはこのココヤシの発芽孔を利用して穿孔した指孔の位置を真似た結果と解釈できるのではなかろうか。さらに、陶・の形態、文様など、楽器としての機能とはほとんど関係がないと思われる箇所についてもココヤシから日本陶・への影響を示している可能性があると思われる。

○研究発表

杵屋正邦における現代邦楽の意義
吉崎清富（東京学芸大学）

〈発表要旨〉

杵屋正邦(1914～1996)は「現代邦楽」というジャンルで主として活躍した作曲家であったが、家元制度の継承に従わず、独自の改革手段をとったという点で、これまでの邦楽界では例のない存在であった。それが現代日本の音楽文化にとってどのような意義を担っているかという問題意識を持ちつつ、私は西洋音楽の教育を受けた作曲家の立場から考察した。研究を始めてみると正邦について書かれた資料がごく限られていたが、幸い、1. 音楽学者吉川英史・徳丸吉彦氏らが正邦と関わりをもっていたこと、2. 遺族の方とコンタクトがとれたこと、3. NHK邦楽育成会の卒業生とも接触できたこと、などによって全体として広い意味でのフィールドワークを現在実施中であるので、その中間報告という意味からこの発表を考えた。

今回の研究の中心は、邦楽危機の改革者としての正邦である。戦前戦後の邦楽界は内的側面、外的側面の双方から危機にさらされていたが、宮城道雄を初めとして、多くの改革を試みる人たちが

現れた。その中で正邦は、家元襲名を拒絶し、口伝・文字譜に対し徹底して五線譜を用い、家元・流派を越えた普遍性ある表現手段を求め、東洋の非合理性と西欧の合理性を認めて双方の共存を目指し、伝統芸能と民俗芸能をも取り入れて芸術的価値観の拡大を計ろうとした。邦楽の改革に際して身を以て挑戦した正邦は、見事に伝統改革を成し遂げた。彼は「伝統からの創造」、「邦楽と洋楽の共存」、「伝統芸能と民俗芸能の融合」の三つを統合して、将来の日本の民族音楽の方向を示してくれたといえる。

○報告

音楽考古学を取り巻く最近の状況について
笠原潔（放送大学）

〈報告要旨〉

考古学は、文献史学を補う性格を持った学問分野である。そうした性格は、音楽史学に対する音楽考古学にも共通している。滋賀県蒲生町杉ノ木遺跡から出土した三弦琴は、奈良時代後半ないしは平安時代初頭の時代に、文献には一切登場しないこうした楽器が実際には存在していたことを証明した。また、平城京右京二条三坊跡から出土した奈良時代前半の琴板は、突起付け根部分に弦受け用の別材部品を持っており、弦が突起に直接結び付けられていたことを示した。この種の琴の後裔である和琴では弦は突起先端の孔に葦津緒を介して結び付けられているが、この出土品は、こうした弦の装着法が奈良時代の後半に至って初めて考案されたことを、さらに言うならば、東大寺盧遮那仏の開眼会に際して急遽考案された可能性を示唆している。

このように、音楽考古学は、音楽史研究に対して様々な情報を提供してくれるのであるが、そうした考古学を取り巻く環境は、最近、急速に悪化している。バブル経済崩壊後の地方自治体の財政危機に起因する発掘調査費用の大幅な削減がその原因である。最近では、各地の教育委員会や埋蔵文化財センターが行った発掘調査の成果がなかなか公表されない事態が起ってきており、また報告書が刊行されても限られた数の関係団体にしか配布されないケースが増えている。

こうした危機に対応するため、筆者らは、昨年、音楽考古学に関する研究会を組織して、楽器の出土情報ならびに資料の発刊情報を交換し、データベース化していく作業に着手した。現在の危機的状況を克服し、より精密な出土データに裏付けられた音楽史の議論を展開していくためにも、多く

の研究者に御協力をお願いしたい。

〈合同例会の記録〉

第64回東洋音楽学会・日本音楽学会合同例会が、平成11年5月8日(土)、お茶の水女子大学を会場に開催された。当日は60名に及ぶ両学会員の参集を見たが、これは二件の研究発表テーマに対する会員の関心の高さを反映したものであろう。学会の発展に伴って、関心の多様化が進んでいることを想像させる。

最初に、近藤直美(國學院大学)が、中国に起源を持つ陶製の土笛「・」の日本における出土状況に関して、最新の現地調査に基づく報告を行った。詳細は別掲の要旨に譲るが、出土点数・出土遺跡数・出土層年代・サイズの多様性・造形面における漂着したココヤシからの影響の可能性など、新たな知見が多く、今後、音楽研究の上で、こうした異分野からの報告が日本の過去の音楽文化を復元する上で重要な位置を占めていくことを予想させる内容であった。

プログラムの後半では、吉崎清富(東京学芸大学)が、戦後邦楽界の雄、杵屋正邦(1914~1996)の功績について報告を行った。これについても詳細は別掲要旨に譲るが、質疑応答の中で議論された「今後、具体的な作品分析に基づいて、正邦の創作活動の評価を進めていく必要がある」「芸術作品と教育教材とは区別して考えるべきであろう」「正邦が五線記譜法を採用したのは、旋律を流派ごとに異なる演奏譜で書き直すための素材を提供するためではなかったか」などの点は、戦後邦楽界の偉人杵屋正邦の業績評価を今後進めていく上で重要であろう。

ともあれ、充実した議論が交わされた例会であった。(笠原潔)

◇第424回定例研究会(1999年6月5日)

上野学園日本音楽資料室

○講演

揚琴とその奏法—巫州回響—

金亜軍(KIN A GUN 揚琴スタジオ主催)

司会: 茂手木潔子(上越教育大学)

(なお、6月例会の司会は全て茂手木)

〈講演要旨〉

「中国揚琴」の歴史は、今から二百年前(明王朝後期)にイタリアの宣教師によって持ち込まれたのが始まりである。インド・イラクのダルシマが進化したものといわれ、類似した形(チター族)のものも多く見られる。揚琴が中国で最初に流行した場所は、広東地帯(現在の香港)である。その頃は西洋から伝来した楽器であることから、

「洋琴」と表記されていた。当時の揚琴は、現在の約半分の大きさで、音階を奏するというよりは、単に打楽器としてコードをリズム打ちする伴奏の立場が主で、現在もその傾向が強く残っている。

また、西洋楽器である揚琴は、中国で改良され、共鳴や弦を強く張っても耐えられる木材を、様々な試行錯誤の末、使用するようになっていった。その頃から、「楊琴」と表記も変化した。改良された特徴として、1. 音域の幅を2から4または5オクターブに増やし、2. 弦をシルクからスチールへと変えた。3. 弦を打つ撥を木から竹へと材質を変え、竹のしなり・軽さを利用することで、基本の演奏(トレモロ)をより細かく・速く奏することが可能になった。4. 弦の端に、音程を変えられる半音レバーをとりつけた。これは調弦をすることなく転調が素早くできるという利点を持っている。楽器の機能が良くなるにつれ、演奏者の技術力(特に腕のコントロール)が求められる、今は「揚琴」と表記されている。

揚琴は合奏をする場合に、中央に配置することが多いのであるが、その理由は、両手で持った撥を振り下ろすことで、指揮をする重要な役割を受け持つことがあるためである。

これからも揚琴は、民族楽器でありながら改良され、発展していくと思われる。筆者も、独奏楽器として、揚琴の存在を確立させていくことに、努力していきたいと考えている。

(当日の演奏曲目: 広東楽曲《紫竹調》、江南民歌《茉莉花》、蒙古名曲《賽馬(競馬)》)

〈司会寸言〉

この発表では、二百年を越える楽器の歴史の中で、揚琴という楽器が、音域・サイズ・音色に大きな変化が起こり、ソロ楽器として展開してきた経緯が話された。また、地域によって異なる曲風、時代によって異なる旋律様式の実例が、広東省の《紫竹調》や江南民謡の演奏で示された。

揚琴はトレモロ奏法を中心とし、中国楽器による大規模合奏の中で中央に位置して指揮者的な役割を果たして来た。そのため、ソロ楽器としての展開はまだ10年程度であること、したがって、楽器独自の作品もまだ少ないこと、また、今回用いている「揚琴」の漢字表記が、洋琴→楊琴→揚琴と、歴史的に変化してきたことが述べられた。興味深かったことは、時代や社会の変化によって音色嗜好に変化が生じ、そのことが楽器の構造や奏法の変化に現れる実態が、中国では上からの要請や教育によって強く現れることであった。

金氏は非学会員であるが、上海出身で現在都内在住の揚琴演奏家。当日は、夫人の高梨美生氏のキーボードと共に現代曲《競馬》も演奏された。

○研究発表

欧米の博物館における楽器管理体制について
中溝一恵 (国立音楽大学)

(発表要旨)

楽器を収集し公開する博物館は欧米各地にあり、独自の活動を展開している。楽器という音を出すために作られた「物」を管理する上で生じる様々な問題の中でも、近年特に盛んに論議の対象となっているのが、演奏するために音を出すこと、および楽器を音を出す状態にする作業、についてである。楽器は音を出し、聴かなければ見学の意味がないという意見と、音を出すことによる「物」としての楽器の消耗が、物を永く保存する役割を担う博物館の活動という点から好ましくない、という相対立する意見が見られる。

これを解決に導く方法としてコンサベーション(保存)という考え方がある。コンサベーションはその目的として、できるだけ手をつけずに所蔵品の文化的な重要性を研究、記録、保持、復元することと定義される。博物館において音を出すために行なう作業は、たとえ調律するだけでもその楽器の姿を変えていく可能性があり、その作業の過程で失われていくものが楽器や音楽の研究にとっては貴重なものであり得るということを認識して、少なくとも記録作業を平行して実施するなど、慎重に対応することが求められているのである。

一方、欧米の楽器博物館に所蔵され展示されている日本の楽器についてはその全体を把握しているわけではないが、以下の問題点を指摘したい。まず、展示方法が不適切な場合が見られる。次に機能に悪影響を及ぼしかねない外国向けの装飾が施された楽器がいくつかの博物館で見られ、楽器の質に疑問が残る。最後に楽器の状態について、破損や部品の欠如等が多く見られる。これは単に博物館の側の無知や無関心として片づけられない問題であり、楽器に関する日本の側からの情報の発信が少ないことにも原因があると思われる。すべてのものが楽器として認識され管理されているか否か日本国内における楽器管理の現状の詳しい観察と分析も必要であり、それが楽器や音楽の研究に貢献する下地になると考えられる。

(司会寸言)

国立音楽大学楽器資料館では、郡司すみ氏を中心として、1997年3月『楽器コレクション管理資料集1 イギリス編』を訳編刊行、博物館の楽器管理に関する世界規模の研究を行っている。この活動を背景に、発表では博物館における楽器管理の現状と問題点が次の4点から述べられた。1. 欧米を中心とした楽器博物館の活動、2. 楽器管理者の関心、3. 欧米における日本の楽器の管理、4. 日本における楽器博物館の実態。

発表の中で特に筆者が興味を持ったのは3.であった。ここでは楽器展示上の左右や上下、楽器付属品の間違いなどについて触れられ、展示楽器によっては装飾性のみ焦点が当てられ楽器としての機能に疑問が残るものがあることが指摘された。このこと背景には、海外の博物館が参考のできる日本の楽器関連文献の不足、日本語以外の海外に発信される情報不足がある。質疑では、学芸員資格取得の過程で、欧米では特に条件が課されていないことや、日本では音楽分野の情報が取り入れられていないこと、また、楽器の蒐集に関して「なぜその楽器を求めるのか」といった倫理観が楽器博物館に厳しく求められることも指摘された。

図書・資料等の受贈

(1999年5月～7月、到着順)

☆は寄贈者(発行者と同一の場合は省略)

『中国北方農村の口承文化—語り物の書・テキスト・パフォーマンス』 風響社 ☆井口淳子
『常総の歴史』第22号 崙書房 ☆増田修
『月刊みんぱく』4,5,6,7月号

国立民族学博物館

『武蔵野女子大学 能楽資料センター紀要』
No.10 武蔵野女子大学 能楽資料センター
『日本音楽史研究』第2号
上野学園 日本音楽資料室
『MLAJ Newsletter』Vol.19 No.4

音楽図書館協議会

『ぎふ民俗音楽』第45,46号

岐阜県民俗音楽学会

『白い国の詩』5,6,7月号

北電力(株)地域交流部

『埼玉の和菓子』 埼玉県立民俗文化センター
『みんぶんだより』No.63

埼玉県立民俗文化センター

『民俗芸能研究』第28号 民俗芸能学会

『民族學研究』63-4 日本民族学会
 『研究紀要』第33集 国立音楽大学
 『平成10年度浜松市楽器博物館年報』
 浜松市楽器博物館
 『日本音楽学会会報』第46号 日本音楽学会
 『音楽学』第44巻2号 日本音楽学会
 『日本音楽学会関東支部通信』第52号
 日本音楽学会関東支部
 『国立民族学博物館国内資料調査委員調査報告
 書集』18 (※CD-ROM)
 国立民族学博物館情報管理施設
 『アジアセンターニュース』No.12
 国際交流基金アジアセンター
 『日本大学芸術学部紀要』第30号
 日本大学芸術学部

CD2枚付、¥18,700
 『能・狂言事典(新訂増補)』 西野春雄・羽
 田昶編、平凡社、¥6,200
 『能・狂言図典』 小林保治編、小学館、¥3,800
 『能の主題と役造型』 西村聡著、三弥井書店、
 ¥9,800
 『はじめての世界音楽 諸民族の伝統音楽から
 ポップスまで』 柘植元一編、音楽之友社、
 ¥2,000
 『仏教と音楽』 山折哲雄著、れんが書房新社、
 ¥500
 『舞踊名言集成』 郡司正勝著、演劇出版社、
 ¥3,714
 『平家詞曲相伝の家 弘前藩士楠美家の人びと』
 鈴木元子著、北の街社、¥5,238

新刊書籍

『アジアうた街道』 松村洋著、新書館、¥2,300
 『風の響 早池峰山伏神楽』 師岡和彦著、
 竹内敏信監修、光村印刷、¥3,000 (Be books)
 『近世上方浄瑠璃本出版の研究』 長友千代治
 著、東京堂出版、¥13,000
 『近代琉歌の基礎的研究』 仲程昌徳・前城淳子
 編著、勉誠出版、¥31,000
 『組踊写本の研究』 当間一郎著、第一書房、
 ¥8,500
 『芸能白書 数字にみる日本の芸能 1999』
 芸能文化情報センター編、丸善出版事業部、
 ¥5,000
 『実録浪曲史』 唯二郎著、東峰書房、¥5,600
 『女性狂言師でござる』 和泉淳子著、広済堂
 出版、¥1,600
 『世阿弥 芸術と作品』 北村勇蔵著、近代文芸社、
 ¥1,500
 『先生のための音楽修学旅行 沖縄』 目黒惇編、
 音楽之友社、¥1,800
 『中国演劇の二十世紀 中国話劇史概況』
 瀬戸宏著、東方書店、¥2,400
 『伝統演劇を学ぶ 日本の文化を今に伝える
 能・狂言・歌舞伎・文楽の世界』 京都造形芸
 術大学編、角川書店、¥4,800
 『伝統芸能の若き獅子たち』 世界文化社、
 ¥1,900 (別冊家庭画報)
 『日本芸能史』 阪口弘之監修、昭和堂、¥2,400
 『日本の伝統芸能 第18巻 南島探訪』 本田
 安次著、錦正社、¥20,000 (本田安次著作集)
 『日本朗詠史 研究篇』 青柳隆志著、笠間書院、

新発売視聴覚資料

○コンパクト・ディスク
 『生田流九州系川瀬派 昔から今へ 地歌の伝承
 (富樫教子)』 ビクター VZCG-8057~61、5枚組、
 ¥15,750
 『郡上のうた』 ビクター VZCG-8062~3、2枚組、
 ¥5,250
 『虚無僧尺八の世界 薩慈(中村明一)』
 日本コムビア COCJ-30465、¥2,520
 『上寿 菊原初子地歌箏曲の世界』 日本コムビア
 COCJ-30254~6、3枚組、¥9,975
 『人間国宝・山口五郎尺八の神髄 尺八本曲』
 ビクター VZCG-8066~77、12枚組、¥37,800
 『人間国宝・山口五郎尺八の神髄 三曲合奏』
 ビクター VZCG-8078~81、4枚組、¥12,600
 『復刻 日本の民俗音楽』 ビクター VZCG-8006
 ~41、36枚組、¥126,000
 『文楽 近松門左衛門全集』 日本コムビア
 COCJ-30250~3、4枚組、¥12,600
 ○ビデオ・テープ(VHS)
 『雅楽(宮内庁式部職楽部、下中記念財団)』
 平凡社出版、第1期:6枚組、解説テキスト付、
 ¥128,000、第2期:4枚組、解説テキスト付、
 ¥88,000
 ○レーザー・ディスク
 『必携・新しい“世界の音楽”学習への手引き
 「アジアの音楽と文化」』 ビクター、6枚組、
 解説書付、¥89,000

前号の訂正とお詫び

◇前号3頁「第59回通常理事会議決事項のお知らせ」の中で、関越地区委員の氏名の表記に関して誤りがありました。増本伎久子氏を、増本伎共子氏に訂正し、お詫び申し上げます。

◇5～6頁「定例研究会報告」の中で、次の箇所
に誤りがありました。下線部のように訂正させていただきます。

第418回定例研究会の講演題目は「アンデスの伝統における世界観と音楽とジェンダー」、講演者名はマックス・ペーター・バウマンです。

編集後記

◇会報47号をお届けいたします。記事の掲載順やレイアウト、編集方法など、毎号小さな工夫を重ねております。会報に対する会員の皆様のご意見や感想をお待ちしております。

◇次号は、大会レポートや総会・理事会の議決事項のお知らせを中心に、1月10日ごろ発行の予定です。

会報編集委員会

理事：薦田治子、野川美穂子

参事：太田暁子、小塩さとみ、甲斐朋江、
金光真理子、北岡朱実、竹内有一、福田千絵、
前原恵美、増野亜子、松村智郁子、三上康子